

どこでも納税、の滑り出し上々。

那須塩原市はゴルフのプレー代にふるさと納税の返礼品としてクーポンを利用できる方式を導入。8月1日から塩原カントリークラブでも実施しているが、ほぼ1か月で20件の利用があり、上々の滑り出しとなっている。

1口1万円の寄付をした場合、3,000円のクーポンが発行され、そのクーポンが当日のみ精算時に利用することが出来るようになっている。

クレジットカード、自治体指定の電子決済を利用している人なら利用可能。所得税、住民税の控除手続は、返礼品が受け取れる寄付と同様の手続で控除が受けられる。8月1日のスタートから1か月の納税額は20万円にのぼり、この納税利用は20件に達しているとみられ、上々の滑り出し。ふるさと納税に慣れている首都圏や県外からのビジターにさらに広がると予想される。

詳しくは、下記を確認してほしい。

どこでも納税

申込時間は **わずか3分**

フロント受付の端末よりお申し込みください！

あなたのプレーが那須塩原市を応援

当施設のプレー代精算は、
是非どこでも納税を

当日精算型ふるさと納税

ご活用ください！

実質2,000円の負担でプレーできます！

- 会員登録不要
- 専用端末から簡単申込で、即時クーポン発行
- 当日の支払いに利用できる

- 右の3つに当てはまる方はご利用いただけます。
- 1 寄付先自治体以外にお住まいの方
 - 2 クレカをお持ちの方 / 自治体指定の電子決済をお使いいただける方
 - 3 住民税を納めている方

※寄付完了後のキャンセル、返金はできません。 ※ご精算金額がご利用クーポン額に満たない場合、お釣りはできません。 ※申込時間については当社調べとなります。

どこでも納税 / 早わかり / 3ポイント

Point 1 どこでも納税ご利用ガイド

- 1 店舗に設置された専用端末で簡単申し込み
- 2 申込完了後に印刷されるレシートを受け取る
- 3 スタッフにレシートを渡し、その場でクーポン(返礼品)を受領
- 4 クーポンを使って本日のお支払いからお値引き

ふるさと納税の返礼品は地元の特産品などが一般的ですが、**どこでも納税は、その場で使えるクーポンが返礼品!!**

Point 2 ふるさと納税の仕組み

那須塩原市 (どこでも納税でゴルフ場の市区町村に寄付 50,000円)

返礼品は現地で使える電子クーポン! (クーポン額は寄付額の30%以下)

ゴルフ場に来たAさん

お住まいの自治体 (課税額の税金から48,000円が控除。寄付額から自己負担金2,000円を引いた額)

税金の控除を受けるためには「確定申告」または「ワンストップ特例制度」申請のいずれかの手続きが必要です。寄付先自治体数が5つ以下の場合は、原則規定申告なしで住民税・所得税の控除を受けることができます。詳しくは、ワンストップ特例制度をご確認ください。

ワンストップ特例制度 ※オンラインでの申請可能な自治体がございます。

Point 3 ふるさと納税可能額の確認

税金の控除がいくら受けられるかは、おもに個人の収入や家族構成などによって異なります。詳しくは右記のQRコードから総務省の「ふるさと納税額(年間上限)の目安」をご確認いただくか、同じページにある「寄付金控除額の計算シミュレーション」などをご活用ください。

https://www.soumu.go.jp/main_content/000408218.xlsx

※QRコードは株式会社ダンソーウェブの登録商標です。

フロント・受付の専用端末よりお申し込みください!

ふるさと納税に関するお問い合わせ 那須塩原市 企画部 企画政策課 資産活用担当 TEL 0287-62-7315

どこでも納税 問い合わせ窓口 dokodemo-nozei@org.mitsubishicorp.com

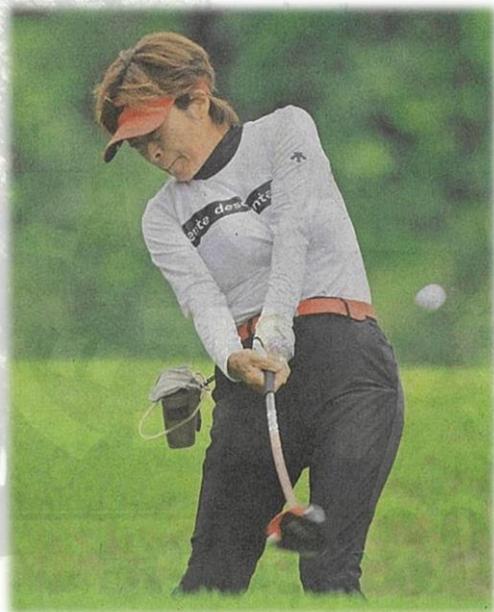


加藤さんプレーオフを制し、初栄冠。 知事盃ゴルフ — ミッドクイーンズの部 —

知事盃ゴルフの一般、ミッドクイーンズの部の決勝は、9月3日ハーモニーヒルズGCで開かれた。ミッドクイーンズの部で、クラブメンバーの加藤仁美さん(競技委員)が初優勝に輝いた。

最終ホールを終え、加藤さんが36,45、森田洋子さん(大田原)が 44,35で共に79となりプレーオフに突入した。2ホール目に加藤さんがバーディーを奪って、2018年の県社会人アマ以来6年ぶりの栄冠に輝いた。

今大会で7回目となるミッドクイーンズの部は、これまで2人が3連覇を重ねてきたが、そこに割って入った形の勝利に、うれしさもひとしおの様子だった。



知事盃グランドシニアの部、北部予選に77人。

知事盃ゴルフ北部予選は9月5日(木)に塩原カントリークラブでひらかれた。参加申し込みは80人に達し、結局77人で熱戦が繰り広げられた。上位33人が10月4日に県民ゴルフ場で開かれる決勝大会に参加する。

▽ 主な上位成績は以下のとおり。

①塩田勝さん72(36,36)②舟岡誠さん73(39,34)③黒沢和夫さん73(35,38)④小池正造さん74(36,38)⑤柳沼達男さん75(36,39)⑥益子隆雄さん77(38,39)



JGA WAG 1Dayスクール開催

JGAが開催するWAG(ウィズエイジングゴルフ)1Dayスクールが開催された。
WAGスクールとは、ゴルフを「始める」「復帰する」「継続する」、そしてゴルフを通じてコミュニティづくりのきっかけとなるスクールで、全8回のプログラムとなる。
1Dayプログラムは、この通常全8回の「JGA WAG スクール」を1日で体験できるプログラムで、8名が参加した。



塩原カントリークラブ！攻略編！！【南コース】 — 中里 鉄也プロ — ☆ 南コース 9 番 ☆



打ち上げのミドルホール。

1打目は右側にバンカー左側はOBが近く飛距離よりも正確性なショットが必要になる。
2打目はグリーン左手前にバンカーが有る為グリーンセンターに狙いたい。
グリーンは奥から傾斜があるので手前から攻めたい。
外すならグリーン手前か右側が良い。

このホールは低い弾道の打球を意識してショットして欲しい！

今回で 27 ホール全ての攻略編が完結。

仕込み技

パーシモンクラブのヘッド材は、その昔は角材で輸入されていたが、その後はヘッドより一回り大きなサイズに切り落とした形で持ち込まれるようになった。それをコッピングマシンと呼ばれる機械で削り、塗装をほどこし、付属の金具を取り付けてヘッドが仕上がる。この機械は横軸の片方に、アルミ素材のモデル(原型)を取り付け、反対側にパーシモンのヘッド材とそれを削る刃をセットし電動で回転させると、原型と相似のヘッドに削れる。モデルは製作者のデザインによる木型をもとに砂で鋳型を作り、溶解したアルミ素材を流し込んで成型する。いわゆる鋳造の技法だ。

モデル通りに削りあげられたパーシモンヘッドに、荒いものから細かいものまで三段階のサンドペーパーをかけて磨いて行く。電動ではあるが、素材を削る刃はノコギリの手入れと同じように目立によって切れ味をよくしておかなければならない。この後、ボールが当たるフェース部分に、フェイスインサート、底の部分にソールインサートと呼ばれる金具をはめ込む。ノコギリとノミで溝を刻み、そこに金具をピッタリとはめ込んでビスで留める。

太くて長いビスで留めるか、細くて短いもので済ませるかが技の見せ所だ。パーシモン材の溝と金具が寸分と違わなければ、その分留め金のビスが小さくて済む。ビスが小さければ小さいほど、パーシモン材がビスを通して受ける衝撃が小さくなり、破壊される度合いが小さくなる。さらに、技を込めようとすれば、修理のためにビスを抜いて金具をはずそうとすると、パーシモン材にひび割れを起こしてしまうように、溝と金具の間に仕掛けを施すことも出来る。作った人にしか修理を出来なくしてしまう。箱根の寄せ木細工の職人や江戸指物師のような秘術を込めることが出来るわけだ。

シャフトにしてもヒッコリー材の場合は、ヘッドとつなぐにはパーシモンヘッドの首の部分の斜めに切り、それとピッタリと合うようにシャフトの接合部分を切り、その昔はニカワで、接着剤が改良されてからは接着剤で接合し、そこを糸で巻いて見えなくした。さらに強度を増すために、パーシモンのネックに穴を開け、その経に合うようにヒッコリーシャフトの先端を削って差し込み接着剤で接合し、ピンで留める方式が採られるようになった。

ヒッコリーシャフトの先端の差し込む部分の長さによって強度が違って来る。短ければ強度を出すためにピンを大きくせざるを得ないが、江場友幸はシャフトをヘッドの底まで差し込むようにして、ピンを出来るだけ小さくした。フェイス、ソールインサートを留めるビスを小さくするのと同じ理由からだ。

金属シャフトが開発された当初は、ヘッドのパーシモン、固定するための接着剤に困り、強度を出すためネックピンと呼ばれる金属のピンで留めた。このピンもヘッドの傷みを減らすため、出来るだけ小さくする工夫が重ねられた。その後、木と金属を固定する接着剤が開発され、接着剤だけで十分な強度を出せるようになった。そうなるからは、デザイン、素材の厚み、重さ、それと切り離せない大きさなどにバリエーションをつける余地はあるが、職人技を込めるという達成感は比較にならなくなってしまった。



年に一、二本だがエバゴルフ工房には、パーシモンドライバーの製作依頼が入る。「昔、パーシモンのドライバーを使ったが、なつかしくなって」、「使ったことがないので、使ってみたい」、「まったくの趣味だが、一度使ってみたい」などが注文の動機だ。最近も九州のゴルファーが、うわさ話で京都のゴルフショップで作っていると聞いて注文しようとしたが、作っていたのは先代の店主で今は故人となってしまう、エバゴルフ工房を紹介されて注文してきた。江場友幸にとっては、秘術を尽くすチャンスが訪れて、心の中で密かに勇んだ。

これも最近のことだが、福島県の愛好家から、革巻きグリップがボロボロに傷んだヒッコリーシャフトのパターの修理を頼まれた。皮巻きグリップはウッドでもアイアンでも同じだが、下地材のコルクのテープを接着剤でシャフトに巻きつけ、それを最適な太さに削り、幅二・五センチほどの皮のテープを上の方から巻いて行く。最後にはグリップ留めといわれる部品で止める。巻き付ける皮テープはアメリカ・ラムキン社の製品が極上と見極め在庫を備えて注文に応えている。革巻きグリップが全盛だった時代には、プロはグリップ留めを取り外してビニールテープで止め打感を確かめながら、その場で自分で調整し易くしていた。調整には皮テープの下に特殊な布を巻き込み、握り具合を変えるプロもいた。

一九八八(昭和六三)年から五年間、富士電機グランドスラム大会という日米のシニア公式戦が開かれていた。第一回大会でアーノルド・パーマーがホールインワンを記録して話題を呼んだが、その第四回大会で、小針春芳はパーマー、リー・トレビノと組んだ。スタート前の練習場で、三者三様にドライバーの調子を確認していたが、三人とも一球打ってはグリップの皮テープをはずし、巻き直しては調整をしていた。この光景を見たプロから、「同じことをやっている」と、驚きとも感動ともつかぬ声があがり、ギャラリーはその一挙手一投足に固唾をのんで見入ったという。

江場が幼少のころ、小針が那須ゴルフ倶楽部のプロ室で、太い丸太でアイアンクラブのヘッドを叩くのを見た時、クラブのロフト、ライ角を調整する作業だと教えられた。その調整のための専用器具が開発され、調整をまかせられるゴルフ工房が増えてくるまでは、ほとんどのプロは小針と同様に自分で調整した。

小針が丸太を使っていたのは、ヘッドのネック部分に傷をつけないためだった。中には大きなハンマーで叩いて調整するプロもいた。ハンマーを使うと、ヘッドのネック部分に傷がついたり、変形したりして、シャフト交換がしにくい。アイアンクラブのネックとシャフトを留めるネックピンが抜けなくなり、ネック部分の切断を強いられることも少なくない。修理人泣かせなのである。小針が丸太を使っていたのは、先々の修理のことまでを考えた知恵だったのである。

那須一筋に

小針はクラブの調整や修理もまず自分でやってみる。とことんやって、にっちもさっちも行かなくなったら、江場のところへ持ってきた。メタルヘッドが出始めたころ、例によってドライバーを持って工房へやってきた。

「ずいぶん重くなってしまったんだ。見てくれないか」。ヘッドの重さを確かめながら、不思議そうな顔で、そう声をかけてきた。江場がよく見ると、接着剤で何かを張ったようなところを見つけた。それをはがしてみると、小さな穴が現れた。



「先生、ここを削りませんでしたか。そして水につけませんでした」と聞くと、あっさり認めた。それを聞いて、江場には重くなった理由がすぐわかった。

調整するのに削る必要が出て、ヤスリで削ろうとした。しかし、手ではかなわないのでグラインダーにかけた。ヘッドがとんでもなく熱くなり、あわててバケツに水を汲んできて、そこにヘッドを浸して冷やした。削ったところの色が黒かったため、炭を粉にして接着剤で練って復元した。

重くなったのは、薄いメタルに小さな穴が開いてしまい、冷やした時に水が入ってたまった。ヘッドを小刻みに振ってみると、「シャカ、シャカ」という音がした。「先生、メタルは硬いがとっても薄いんです。でも、熱くなるまでグラインダーを使えば、穴が開きます」。江場は笑いを堪えるのに必死だった。

自分で調整したり、修理したりするのは、ゴルフショップが身近になかった時代のプロに共通する。コーチそれも、テクニカル、フィジカル、メンタルに囲まれて、スケジュール調整や遠征先までの切符の手配から食事まで、マネージメント会社にまかせる。それが今のプロだ。

小針らの世代のプロに、そんな若手はひ弱に見えた。国内で勝っても、海外に出ると、多くはトーナメントの上位もおぼつかない。内弁慶の若手が歯がゆかった。将来のゴルフ界に何を望むと聞かれると、小針は必ず「日本のプロに、世界メジャーで早く一勝してもらおうこと」と答えた。

小針が「那須の神様」と言われた所以は、那須から外へ出なかったこと。すなわち所属を那須ゴルフ倶楽部から変えなかったことにある。それに関して江場は「ワイだってウチに来ないかと声をかけられたんだ」と、小針から打ち明けられたことがある。条件がすべてそろえば、年収は三倍になるはずだったという。

エバゴルフ工房の常連客に、茨城県の名門ゴルフ場のメンバーでクラブチャンピオンに輝いたこともある歯科医がいた。ある時、工房での話しがはずんで、「小針先生と会って話しがしたい」という。はぐらかし切れなくなって、小針先生に電話を入れた。

小針は江場に「お前が大丈夫と言うならいいよ。サインが欲しいんだったら色紙を持って来な」と二つ返事だった。歯科医と江場と三人でコーヒーを飲みながら、そのゴルフ場に所属していた往年のプロの名前を出して、しばらくゴルフ談義にはずんだ。

帰る道々、歯科医は車の中で、小針の気さくな人柄に感激していた。「雲の上の人だろうと思っていたが」と嬉しそうにサインを持ち帰った。腕に自信があれば、話しをきいたら次はレッスンを受けたいと願う。その気持ちは大方のゴルファーならわかるだろう。

曲折があって、歯科医、歯科医がメンバーのゴルフ場に所属する若手プロ、江場、それにゴルフのレベルは落ちる、歯科医の知り合いの二組でラウンドすることになった。スタートの時間になっても濃い霧が晴れる気配はなかった。よその組も、「出るか出ないか」で迷っていた。空をしばらく見上げた後、「二、三ホール行けば霧は晴れる」と小針が決断した。ただし、女性がいた後の組へ、安全のために江場を入れてスタートした。那須ゴルフ倶楽部では、霧の日には危険防止に、1カートに2人のキャディーをつけてスタートする。

先の組が2番をホールアウトしたころ、茶臼岳の山頂から雲が飛び去り、裾野の方から霧は晴れていった。その後は快晴に近いゴルフ日和になり、誰もがその慧眼に驚ろかされた。「ワイが何年ここでゴルフをやっていると思うの」と涼しい顔だった。ここでもやはり「那須の神様」だった。小針が七十五、六歳のころのことだった。ハンディ5の歯科医は五十歳代。「先生のコースを歩く速さと、ショット力、ボールの勢いにはとてもついて行けなかった」と江場にもらした。



気遣い

大島富五郎らが発起人になった「小針プロを讃える会」をめぐって、江場には忘れられない思い出がある。事務局から、会の趣旨の説明に添えて、参加申込書が届いた。当然ながら、すぐに参加の返信を出した。それから数日後、小針が自転車で工房にやってきた。コーヒーを飲みながら、昨今のクラブの使い勝手や若い後輩プロのゴルフなどに話しが及び、江場の頭に「囲む会」のことが浮かんだ。「先生おめでとうございます。小針会がいよいよ実現するようで、私も申し込みました」

「エッ。君のどこまで誘いが来たのか」

「当然でしょう、先生と私の仲を知る人がいないわけじゃないから」

小針からは意外な言葉が返ってきた。

「やめとけ。ワイはそういうことはあまり好きじゃないんだ。しかし、気持ちを受けないわけにも行かないから……。タダじゃないんだ、会費もかかるだろう」

会費は五万円だった。江場にとっては、小針への敬意を刻むには、ちっとも高い出費ではなかった。「(参加を)取り消せよ。君はワイと回ろうと思えば、いつでも回れるんだから」その言葉で参加を取り消す連絡を入れた。

小針が後輩プロの気持ちを十五年間にわたって、有り難く思い感謝し続けたのは言うまでもないが、自分との関係をそれとは別と考え、「やめとけ」と言ってくれた。そう感じて誇らしくもなったことを、昨日のことにように思い出す。

小針が工房を訪れ、クラブに調整や修理を江場に頼んだ時、手軽に済んだ時でも、必ず「いくらだ」と尋ねた。「先生、今日はいいですよ」と言っても、そのまま帰ることはなかった。江場が固辞しても、テーブルクロスの下に相応の“手間賃を”はさんで帰って行った。どうしても受け取らないとみると、江場の妻に有無を言わず手渡した。

そんな時、「君はこれで食っているんだろう。ワイはゴルフで稼げばいいんだから…」が口癖だった。江場が小針の近くで過ごした長い年月には、「師事」を超えて、「私淑」の時間が流れていた。そこからは、「那須の神様」の神髓の端々が浮き出て来る。

小針には師匠がいなければ、弟子もない。サム・スニードのスイング写真を見ては、これに近づきたいと念じてクラブを振った。体が硬いから、グリップの右手のひらをクラブから離す。体が小さいから、ティーを高くして、高い弾道を求める。クリークを自分仕様にして、グリーンに載せた。それも、カップの近くに寄せて。「腕とクラブは一本の棒」を地で行った。

多くの理論は語らなかつたが、自分の勘と工夫で、自分のゴルフを作り上げた。人をまねるのは悪くはない。だが、自分が及ばないことをまねようとしても無駄だ。相手の欠点を見抜け。それを知らずして勝つことは出来ない。「己を知り尽くした職人」。神様が逝ってしまった今、日ごとにそんな思いがつのって来るのである。

ゴルフ工房を営み、同じゴルフの世界の人間とはいえ、親子ほども年の離れた江場の感覚を認め、自分に取り込んで行く。小針の心はいくつになってもみずみずしさを保っていたのだろう。江場は「那須の神様」に、そんな形で相手をつとめたことを、「唯一の自慢」として胸に秘めている。

(つづく)



編集後記

異常に暑かった夏。コースも36度超えの日がたびたびあり、熱中症など高温事故の防止に神経をつかう日が続いたという。お盆過ぎから8月末にかけての迷走台風と、それに伴うゲリラ豪雨にはうんざりさせられた。8月31日から9月1日にかけては、コースコンディションが悪化、ビジター営業を急ぎよ止め、月例杯だけを実施した。豪雨の際には、練習場方向から流れ落ちた雨水でキャディーマスター室が浸水する被害を出したこともあったという。おかげで集客も目標には少し届かなかったという。赤とんぼが舞い、さわやかな風がながれるゴルフシーズンの到来が待たれる。

井上安正

